

A君――

本誌二月號への續稿は休んでしまった。

それはぼくのなまけ性のためだ。頭がまためつきりと鈍くなってきているせいもある。

でも自分の内にハッキリしたモノサシをぼくが持っていれば、ぼくの認識や思考や判断が、これほどスロウ・モーションにはならないかもしれない。僕がイデオロギイのようなものを持っていた頃は、もっと早かった。そういうモノサシを失いはじめてから次第にぼくはニブクなって来た。そして現在にはほとんどモノサシを持たぬ。あちらを向いても、こちらを向いても、僕は素手で呆然として立っているのに近い。僅か十枚そこいらの評論めいた文章を書くのに五日もかかったり、そうやって書いたものを六日目にはつまらなくなつて破つて捨ててボンヤリしていたりする現状のホントの理由はそれなのだ。しかしどうもしかたがない。モノサシは僕が捨てたいと思つて捨てたのだから。

さて、この前（一月號）の話をつづける。

「インテリゲンチヤの機能の中で最も貴とい『判断保留』について」語りたいたいと思うのだが、その前に、この事に差しあたりは直接の関係はないように見える話を一つはさましてくれ——

ぼくはぼく流の「インテリゲンチヤ論」をズット以前から持っていて、それを噛みなおし噛みなおして來たのだが、それを一番強く濃厚な形で考えつめたのは大戦中だった。だから現在のぼくのインテリ論の中の重要なくつかのポイントが戦争中に発想されたものである。

一體ぼくはほかの思想家たちとは違っているらしい。たいがいの思想家たちは落ちついた時に永いユツクリした時間をかけて思想を打ちかためるらしいが、ぼくはそうでなく、忙しい時や危険にさらされた時でなければ自分の思想をたしかめられない。いろいろの思想の中でどれが自分のもので、どれが他から借りた思想であるかの選み分けが平常時にはできないのである。そういう人間だ。もちろんこれは、そう珍しい事ではなくて、普通の生活者の中にはぼくと同じような人がたくさんいると思う。

戦争中は自他ともに非常に忙しく、そして危険であつた。そのいろいろな瞬間にぼくはそれまでハッキリ見えなかつた事をハッキリ見たり、突っこんでは考えられなかつたことを突っこんで考えたりした。もちろん考えた事の大部分は支離めつれつで答えにまで到達しえなかつた。にもかかわらず、ぼくに取ってそれらは非常に高い価値を持っていた。

ことに僕の注意は戦争前から戦争中へかけての日本インテリゲンチヤの姿に引きつけられた。

日本インテリの大多数が戦争前から戦争中へかけて、あの戦争に對してどんな態度を示しどんな心理を抱いていたか——その中心的な姿や色あいなどについては、ぼくがあらためてここで語る必要はないだろう。ただあの戦争に就いて眞正面から素朴に肯定的だったインテリはほとんど居なかつたと言えるところに、あの戦争に眞正面から明瞭に否定的であつたインテリもほとんど居なかつた、と言えは足りるであろう。今ここに述べるのは、その中の小さなエピソードの一つに過ぎない。ただこの話はそれを聞いた時は勿論、その後もそれを思い出すたびに僕にいろいろの事を考えさせて來た。

話の事件そのものは多分「太平洋戦争」に突入する以前の事だと思ふが、日本軍が中國に侵攻して各地で相當の苦戦をしていた頃、上海附近で戦局が一種のこう（膠）着状態になつた中での話だ。その邊に投入された日本軍は日本の各地からのいろいろの部隊で、その一部に東京部隊があつたが、それが他地方の部隊にくらべて強かつたという話だ。部隊兵員の平均體力は必ずしも強くはないのかからわず、その戦闘力と戦線保持力が、九州出身などの部隊などよりはるかに強かつた。九州のたしか小倉あたりの部隊は日露戦争當時では、日本全國のあらゆる部隊よりも勇猛で強く、そして東京出身の部隊は全軍で笑われる位に弱かつたそうだが、今度の戦争の上海では反對に、小倉へんの部隊よりも全體として東京部隊が強かつたと言う。そして地方出身の部隊よりも東京部隊にはインテリが多く、他とくらぶればインテリ部隊と言ってもさしつかえなかつた由。

この話をぼくは三人も四人もの人から聞いた。その中の二人ばかりは現にその戦線に従軍して

いた人であった。又この話を裏づけてくれる記事を新聞でも雑誌でも讀んだ記憶があるから、或る程度まで事實だと思つてもよからうと思う。ぼくにはこの話が非常に興味があつたので、尚それに就いて自分の方からいろんな人に問合せをしたり、考えてみたりした。言うまでもなく、その時も、あのような戦争の中で、わが方の或る部隊が、戦争に強かつたという話を聞いて、單純に愛國主義に喜ぶ事は私には出来なかつた。ただ一つの腹ごたえのする話としては聞いたのである。

日露戦争時代と今度の戦争では戦場での戦闘というものの質が變つて來ていて、今度の戦争は近代戦であるために戦闘に於ける知力の比重が重くなつてゐるためであることは言うまでもあるまい。日露戦争の際に日本陸兵の力が發揮されたのは主として平原や丘陵地帯の戦線であつたが、今度の上海附近ではクリークの多い低地の戦線であつたこともある。更に基本的な事を言えば、同じく帝國主義的な戦争とは言いながら日露戦争は日本人としてやむにやまれない理由から受けて立つたという要素もあつた、言わば民族戦争的な本質をも持った戦争だつたが今度の戦争はそれにくらぶればより純粹な侵略戦争であつた——そのちがいが兵隊の心理にも反映してゐたためであると言える點もあつたらしい。

それらの證據に、東京部隊が強かつたと言う、その強さの種類が、日露戦争時に、小倉部隊が強かつたと言う事とは非常にちがつてゐるらしい。いろいろの報告を總合して見ると、それは攻撃戦に於けるよりも防禦戦に強かつたようだ。爆発的な戦闘よりも持久的な戦闘に強かつた。より多數の敵兵を殺傷すると言うよりも味方の兵員の死傷を最低にいとめたという點で強かつた。一言に言つると、戦闘の中から自分たちをいかにすれば救い出すことが出来るか、つまり戦争の中

での生きのび競争に於いてすぐれていたと言う事になる。

そして言うまでも無く、近代兵器を使つての近代戦の中では、兵士たちのしていることは、又彼らに出来る唯一のことは、結局は「生きのびる競争」だけだと言える。それに東京部隊が強かつたという事である。と言うことは、インテリゲンチヤが、そうでない者たちよりも、近代的な格闘の中では、より強いことの證據の一つであり、そしてその強いとか勇猛であると言うのとは違う。或る意味で「弱さ」のために生れて來たものであると言ひ得る證據の一つとしてある程度まで役立つ例ではないだろうか。

このエピソードから、これ以上のモラルを引き出したり、これを以てぼくのインテリ論の何かの支柱にするように言ひひろげる事は、さしあたり控えたい。誇張や歪曲に陥る危険があるから。ただこの前の回の所でぼくの言つた——インテリはその呪われた運命に於て幸福である。

——と言うことは、別な言い方をすれば、インテリはその弱さに於て強いとも言えるのであるが———そういう見方にどこかしら、照應するエピソードであり、同時にこれから述べる「判断保留」の事に側面からの照明を投げかける形で、多分つながつて來る話になるだろうと思うから、君の記憶にとどめて置いてほしいと頼むだけにする。

3

さて、先ず判断のこと。何が眞實であるか、何が白であり何が黒であるかの辨別がいかに困難であるか。それは先づ本來的に困難であり、次の現代のマス・コミュニケーションの影響ゆえ

に二重に困難になっている。

その次に言わなければならぬ事は、事物の真相や黒白を判断するのは、たしかにインテリゼンスであり、インテリゲントであるのだが、同時に眞に強いインテリゼンスやインテリゲントがより正確な判断に近づくために働かせる機能の中で最も大きなものは判断を下す事を出来る限り引きのぼすという仕事である。もちろん意地悪や反対病のためでは無い。當の事物の中に含まれている總ての要因をあらゆる角度から、あらゆる光に照らし出した上でとらまえたい欲望のためである。そして、前述の、判断というものの本來的な困難さや、マス・コミの影響からの二重の困難さが一般にはそれほど強く感じられていず、たいがいの事の判断が不當に性急になされている現状の中では、インテリゼンスとインテリゲントのなさなければならぬ、そして、なし得る事は、現象的には主として判断保留の仕事であろう。これらの事が現在非常に打ち捨てられているようにぼくには見える。以下、これらを順を追って走り書きして見る。

4

ぼくは一昨日、新宿の或る街角の歩道から二尺離れたコンクリートの路上に一個のバナナの皮が落ちていたのを見た。「これを踏むとすべるなあ」と思いながら見て過ぎた位だから、ぼくはそれがそこに在った事を信じている。昨日そこを通ったら既にそれがそこに無かった。誰かが持ち去ったに違いない。ごく単純なことだ。ところが、いったん、一昨日のその時間にその場所にバナナの皮が在ったことを立證する必要が起きてくると事は恐ろしく面倒なことになる。ぼくに

は、ほとんど立證する手段が見つからない。まして、假にBという人がいて、一昨日ぼくがバナナの皮を見た直後で道路清掃人がそれを拾い去った直後にその場所を通りかかってその箇所を見たとする。又は、そうでは無くても、何かの必要からぼくのバナナの皮についての言葉を否定しようと思圖したとする。いずれの場合もBは、その時間にそこにバナナの皮は存在しなかったと言うだろう。ぼくは、いや在ったと言うだろう。假にCがBとぼくの間立って、事の眞偽を判断しなければならぬとする。これは実に不可能と言っても差しつかえが無い位に困難な仕事になる。そしてその困難さは唯單にその眞偽の立證の手段が極端にデリケートな少數のデータに限られており、しかもそれが立證圈に入って来るか來ないかが偶然のチャンスにまかされているためばかりでは無い。そのぼくの中に、誰がどのような反證をどれだけ多く持ち出して來てもガンとして動かないところの「バナナの皮はその時そこに在った、それを私は見た」と言う素朴認識の動物的確信があるからだ。同様にBの中にはその眞反対の、しかしガンとして動かない點では同じような動物的確信があるからである。この二つの素朴認識の間には、そのままの形ではどこまで行っても眞の融和は起り得ない。眞の融和は多分、それらの素朴認識者の双方か又は一方の側に於て動物的確信からもっと高次の別のものに成長變化することに依つてのみ起り得るのである。しかし、この事は今ぼくが語ろうとしている事がらとは又別の細かい考察を必要とする事だと思ふから、これ以上述べる事は控えるとして。

—— 僕が語ったのは、事物の判断というものの本來的な困難さの事である。

つぎにぼくらは好もうと好むまいと現にマス・コミュニケイションの中に生きている。それからの影響はぼくらの全身をひたしている。ぼくらは先ず事物を判断する主體として、マス・コミの液の中にズップリつけられて準備されている。そのぼくらの前にぼくらが判断しなければならぬ事物が持つてこられる。その事物も既にマス・コミの液にひたされている。この場合、この主體と客體は共にマス・コミにひたされているのだから、それを最小公約数として双方から差引けばよいと言うわけには行かないから困る。因數は一定していないし、ファクターズ間の相互作用には定式が無い。期限に複雑な亂反射のただ中に居るようなものだ。

これまで個人の認識の上に作用するマス・コミの力の強さについては方々で言われてきているが、しかし、實際に於てわれわれが事物の判断をくだす時には、マス・コミの影響から判断を歪めないようにする警戒は實に僅かしかないのが普通だ。觀念的には、マス・コミの怖さを充分に知っていないながら、實際上ではなんとたやすく、われわれは新聞や雑誌やラヂオの報道や人づての話や噂さなどから支配されることであろう。われわれはマス・コミからの催眠術に非常にかかりやすくなっているのである。われわれの脳ずいは既にそういうふうに軟化してしまっているのだ。しかもこのように旺盛な被催眠性の所有者は同時に他の人に催眠術をかける力も強い。マス・コミによって支配される人は、同時にマス・コミを作り出すことに参加することに依って他人を支配する人でもある。困ったことには、或る種のマス・コミからの支配から免疫である程には冷静な知性を持った人でも、別の種類のマス・コミからは實に簡単に支配されてしまうことだ。Aと言う種類の催眠術にかからぬように氣を付けている人が、その事には成功しながら、Bと言う種

類の催眠術には手もなくひっかかるように。しかもB種の催眠術にひっかかる心理的理由が、A種の催眠術にひっかかるからぬように努力していた緊張のためであったと言う場合が非常に多いということ。

その事は、例えば現在日本人のある人たちは自由主義系の機関から流された報道ならば文句なしに信じて共産主義系の報道は頭から疑ってかかり、別の人たちはちようどその正反対の事をしっていて、しかもその双方の人たちがそうしている事に客観的には格別の理由が無いこと。そして、自由主義系の報道も共に報道であつて、すべての報道というものが持っている歪みと共に或る意味での眞實をも含んでいる者として公平冷静に眺めることの出来る日本人がいかに少いかと言う事實を見れば思い半ばに過ぎるものがあるろう。

いずれにしても、われわれはマス・コミの支配からのがれる事は絶対に出来ないのだ。困難は、われわれが支配されざるを得ないものから、支配されてはならないと言う、まるで撞着した課題の中にあるのである。

そこで以上のことは次ぎのようにたとえる事ができる。

静止した所で静止した標的を銃撃して命中させることも、たやすくは無い。それが高速で飛行中の飛行機の中から、別の目的で高速で飛んでいる別の飛行機上の一點を銃撃して命中させなければならぬとなると、實に實に困難であろう。

現在における事物の判断、ことに社會的事物の判断の困難さは、そのようなものではなからうか。判断しないですましていられば問題はなからう。しかし判断しないではわれわれの生は停つてしまうような事がらに就ては判断しないではすまされない。われわれは既に飛行中の飛行機

にのせられてしまっているのだ。銃撃は命中させなければならぬのである。

それには訓練が必要であったり、計器が必要であったりするだろう。そして、結局は、そういうものを含めた上で、積み重ねられた経験が最後にモノを言うということになるかもしれない。いずれにしても、先ず困難の深さとその種類が充分に感じられなければならぬだろう。

6

しかしながら、判断という仕事にまつわる困難さを充分に感じた個性が、往々にして絶望に陥ちたりニヒルに流されたりすることは事實である。それは理由のあることだ。なぜならば、困難が充分に鋭く感じられた瞬間には、その人の上に判断不能の状態が起きるわけでその時彼はその事に關してはいっさいの據り所や尺度を失ってしまったて、瞳孔散大し、どうしてよいかわからなくなり、事實どうにもできなくなってしまふ。即ち絶望とニヒルの状態と同じになる。

ある個性はそこで倒れる。實際そういう人は一杯いた。インテリゲンチャの中の自殺者たちの大部分はこれであつたと思う。或る個性はニヒルの中に穴を掘つて、他を見ないですむようにする。デカダンのある人たちがこれに當る。そして極く少數の或る個性だけが、再び立ちあがつて、より強い判断に向つて歩き出すのである。

この第三の種類のインテリにとっては、したがって、判断不能であつた時間は、判断を保留していた時間だと言えるわけだ。

いずれにしても、絶望やニヒルやデカダンスの影を全く持たないところのインテリゲントはほと

んどいないことの理由はその邊にあるのだらうし、又、或る種類の絶望やニヒルやデカダンスがそれ自體としてはどのようによいものでもあつたとしても、人間のインテリゼンスのタテの流れの中では貴重なステーチであることの理由もその邊にあるであらう。

それはとにかくとして、同じくインテリゲンチャとして歩いて來ながらも、右にのべたような絶望やニヒルやデカダンスに耐えきれないという理由だけのために、せつかく手に入れた判断保留の機能までも根こそぎ投げ捨ててしまつて、初等數學的論理の出發點の後方まで驅けもどつてしまつて、そこでケガをする恐れのない花火を——「正義」と「人道」という花火を打ち上げていゝるインテリが、外國にも日本にも多過ぎる。それらは、ぼくの考えによれば眞のインテリゲンツトではない。齒の抜けた獅子がオカユをすすりながら舌が大根の尻っぽにさわつたのを「骨だ骨だ」と騒いでいるようなものだ。又は、豚に退化してしまつたイノシシが目やにの間から見えた木の根っこを敵だと思つてそれと格闘しているようなものだ。

——などと口ぎたなく言つたからには、内外の疑似インテリの中で誰と誰とがそのようなものに當るか、そしてそのような性質が、どのような場合にどのような形で示されるかに就いてハッキリ語らなければ充分でないだらう。ハッキリ語ることは、ぼくに出来る。この前の回の中で言ひ出したピカソやアラゴンの事などもこのくだりで語るのが一番適當だ。しかしそれだけでかなり長くなる話だから、ここで今からそれをしていゝると中途半端になるのは必定だ。それはまたこの次にしよう。

ただここで概括して、この戦後十年間に於ける内外の事件や情勢や事物——その中にはもちろん朝鮮戦争や三鷹事件や松川事件や平和問題を巡つての兩陣營の對立關係や中共治下の中國の實

状やアメリカの日本支配の情況その他が含まれる——などの認識や判断の點で、日本の代表的なインテリと言われている人たちの多くが、如何に「すばやい」判断者であったか、しかもそのすばやさには根據が薄弱であつたばかりで無く、どんな判断をくだしても自身が身を以てもつて責任をとる必要がない、又は自身がそのことからどんな危険をも受けるおそれが無い場合や無い程度に於てすばやかつたと言う特色があつたのみならず、風が吹いて來た下で草木がいつせいに一方になびくようにその時時の風の方向のままに「一邊倒」して行つたすばやさであつた、とだけ言つて置けばたりるであらう。

内外の事件や情勢や事物の判断について、「私にはよくわからない」と言つたり、「材料が不足しているから自分には判断をくだす力が無いと言つたりするインテリが、なんとすくなかつたかという事である。もちろん、文字通りわからなかつたり判断力が無かつたりするのは情けないことだ。しかしそれさえも、充分の根據もなしにわかつたと言つたり判断を下したりする者より數倍ましだ。これは社會的に有害な毒を振りまくが、かれはすくなくとも無害だから。しかし概してインテリの場合には、性急に真相がわかつたものとして判断を下す者よりも、それをわからないとして判断をためらつている者の方が、客觀的には正確な判断に近づいている。又は少くともやり方次第では近づき得るといふ關係がある事を見忘れてはならぬ。

A君——

ぼくが言おうとしているのは、結局はその事なのだ。

そしてその次にぼくの言いたい事は、こうである。

ぼくは、あのインテリとこのインテリと、あれらのインテリとこれらのインテリとが互いに非

常に質がちがうように言ったが——そしてたしかにいろいろの性質のちがったインテリが居るが——しかし、大所高所から見れば、現在の、ことに日本にゴタゴタと入れまじっている十萬や二十萬のインテリがそれほど違ったタチのものである道理が無いとも言える。知能や感覺の内容も程度も大體似たようなものだし、良心や誠實さや意向の質も量も、それほど違いはしない。人口ちゆうみつな場所に住む同一階級の人間は非常に強く均質化するものだからだ。現に左翼のインテリと最右翼のインテリをくらべて見ると、その差異は全體としてはほとんど無く、裁判官と被告とをくらべてみても、たいがいクマとアナグマほども違ってはいない。

事物の判断にあたっての材料の據りどころや知識や思考方法なども、AとBは全體として似たようなものを持っているきりだ。だのになぜAは性急な判断をくだしやすく、Bは判断を保留するのであるうか。

BはAよりも自分及び社會に對して誠實だからだと言つてすまして置けば一番かんたんで、そして僕の話の筋には一番つごうが良い。しかしぼくはそうは思わぬ。現代に於いて、眞に人を動かす動力としての「誠實さ」という徳目をぼくはあまり重要視しなくなっているし、まして誰かが誰よりもよけいに持っている「誠實さ」などというものが大した効能のあるものだとは思われない。

ほんとうは、AとBとが各自の判断で自身の何を賭したか、その違いによつて右の違いが出て来るのではないかと思う。人はだれでも自分にとつて重大なものに賭けたことによつて、そしてその重大さの度合いに従つて判断に慎重になる。つまりそれだけ判断保留をする率が高くなるのだ。判断が誤つていれば賭けたものを失うからだ。

見たまえ、現在いろいろな事についての勇敢な判断者がインテリの間には充分しているが、なんとそれらの人々は假りに判断を誤ったとしても何一つ失わないだろう。

極く最近の例をひとつだけあげるならば、中共からまねかれて御馳走を受けて一月ばかり北京あたりを散歩して歸つて来て「中共は天國的に良い國だ」と言ったりしているインテリなど、何一つ失う恐れが無いだんではない。今に別荘がもう一軒建つだろうことは疑えない程である。同じインテリが戦争前に似たような事を「判断」しようものなら、まちがいなく獄に入れられたであろうから、したがってそのインテリはそんな判断はオクビにも出てこなかっただろう事はまちがい無い。

戦争前よりも世なみが良くなったからだと言われればそれきりの話で、めでたがっていけば、すむ事かもしれない。

ただ人が重要な事からに就いて判断をくだしている時に、ぼくらは先ずその人間の身體のぐりを見まわして、彼がその判断に何を賭しているかを調べてつかんでから、判断そのものに傾聴した方がよいようだとは言ってもよからう。

A君――

どうもうまく行かなかつた。あれやこれやの角度から語つてみたがぼくが押し出したい本筋はまだホントに浮びあがつて來ない。この次を期するより手が無い。

くりかえして言ふが、判断保留のことは、多少ともチャンとしたインテリゲンツトの一番立派な職能である。それがなぜ立派かと言えば、もちろん、結局に於て、判断したくないからでは無く、自分のためにも他人のためにも、しっかりと腹の足しになるような判断を「間に合うように」したいからこそその保留だからだ。

(一九五五年二月)

底本.. 「三好十郎著作集 第五十九卷」三好十郎著作刊行会

1966 (昭和41)年1月30日 発行

初出.. 「群像」

1955 (昭和30)年3月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23)年4月18日